生産者の思いに耳を傾ける参加者。

青々と葉が茂る桃畑。

福島・桃生産者の努力と思い、私たちが伝えていく

東海コープ事業連合（以下、東海コープ）では、今年の夏、福島県産の桃を、宅配（共同購入）や店舗で取り扱うことに決めました。プロモーション用のレポートを作成するため、6月19日、東海コープの組合員3人が福島の桃生産者を訪問しました。

福島の生産者の現状を伝えるため、訪問

今年の夏、福島の桃を供給する東海コープ。桃の取り扱いについて、3月から打ち合わせや学習会を行なってきました。そして、6月19日、コープあいち、コープぎふ、コープみえの組合員計3人が、JA伊達みらい職員や生産者のもとを訪れました。桃のプロモーション企画のひとつとして、生産者たちへインタビューを行ない、それらを機関紙等に掲載するレポートにまとめるためです。

組合員たちは、JA伊達みらい管内の生産者の放射線への対策をまとめた映像を見たり、生産者の畑を見学したりしました。コープぎふの組合員である山村まさこさんは、「この地域には、祖先から受け継いだ90年間の桃の生産技術の継承があるそうです。それが放射線の問題で止まってしまうことを、なんとしてでも阻止しようという、生産者の皆さんの思いと努力に心打たれました」と語ります。

福島の農業の取り組みについて、説明を受ける参加者。

知らないことが多いことに気付きました

映像の中では、果樹の中で放射線を含むのは、葉っぱや樹皮が主な部分ということや、根からの放射線の吸収は少ないことなどが紹介されています。

葉は冬に落ちるため、樹皮の放射線量を下げれば、果実への放射線量を減らすことができると考えた生産者は、枝につららができる極寒の時期、果樹を一本一本高圧洗浄したり、粗皮削りをしたりという作業を行なってきました。高圧洗浄を行なった果樹の放射線量は、46～71％低減し、粗皮削りを同時に行なったものは62～79％の放射線量の低減につながりました。

今年の桃は、ほとんどが20ベクレル以下、もしくは限りなく0に近い数字が予測されます。コープあいちの組合員である加藤恵子さんからは、「ここに来るまで、放射線の知識もなかったし、除染のやり方も直接水で桃の実を洗うのだと誤解していました。実際に食品を購入する方に向けて、放射線について理解できるツールを制作してみたらどうでしょうか」とアイデアが出されていました。

今年が正念場

その後、生産者の斎藤栄慶さんの桃畑を訪れ、交流しました。昨年、この地域で作られた桃に含まれる放射線量は、国が定めた100ベクレルという基準値（当時）を下回っていましたが、市場での取引価格は従来の半値でした。今年も同じ値段がつけば、多くの生産者が、農業を断念する恐れがあります。コープみえの組合員である吉冨あゆみさんは、「生産者の努力を多くの人に伝え、安心を広げていければと思います」と力強く話していました。

東海コープは7月下旬に再び福島を訪れ、桃の出荷の最終確認をし、8月に宅配・店舗で供給していきます。

※コープぎふ、コープあいち、コープみえの東海3県3生協からなる連合会。